

中国視察レポート

森 陽介

♪ 規模とレベルにびっくり。

今年の8月、経済成長で活気づく北京と上海にアコーディオンを担いで行ってきました。視察期間中、プロ・アマチュアを含めてアコーディオン奏者をこんなに見たのは初めてでした。

中国アコーディオン界の規模の大きさとレベルの高さは話には聞いていましたが、実際に第10回北京国際アコーディオン芸術祭(コンクール)を見てみると予想以上。30人くらいの子供たちが指揮者に集中しながら民族音楽やジャズを暗譜で立て続けに合奏する迫力。コンクール会場の大学校舎内、せわしく人が行き交う中でピアソラのフーガのリハーサルをする学生達の真剣な表情。演奏の質も高く、アコーディオンを専門的に学ぶ学生からはそれぞれの音楽の世界を追求する熱意が伝わってきました。【写真】はアンサンブルクラスの決選に出場するグ



ループ。本番ではお互いに顔を見合いながら、ピアソラの「リベルタンゴ」とラグタイムジャズを計十数分ほど。熱い演奏でありながら、アコーディオン奏者の男子学生の表情がとてもクールでした。

♪ 冷や汗ものだった!?

僕自身がアコーディオンの演奏をする機会は、北京小年宮での「交流会」と「中日交流の夕べ」の2回。選曲はスタンダードアコーディオンのための2重奏の現代曲。今回は全くの準備不足と力不足でパートナーの柴崎和圭さんには迷惑をかけてしまいました。「この後、本当に自分が弾くんかいな」…、子どもや学生の熱演を披露された後、たっぷりと冷や汗をかいてしまいました。

北京や上海では日本の様に大人が集うサークルや教室はほとんど無いようで、滞在中、耳にすることはませんでした。今、熱心に弾いている多くの子どもや若者たちも演奏家や指導者に

《P.20へつづく》

急成長する 中国のアコーディオン界。 フォルクス・ワーゲンでレッスンに通う子も!

バツグンに多い「青少年」の出場者

コンクール三日目(決勝)から審査に加わった。松永氏と分担しての審査対象は児童A組(10~12才)、児童B組(9才以下)、少年A組(16~17才)、それに合奏組である。児童A組、B組、少年A組、B組、青年組、芸術家組など32歳までを対象に、とりわけ児童、少年組が年齢別に細かく部門分けされているのを並べてみても、小、中、高校生あたりの出場者がバツグンに多いことがわかる。

中国では音大を頂点に、専門学校、少年宮(地域単位のいわばクラブ)など、裾野を広く青少年がアコーディオンを本格的に勉強している。日本の関東アコーディオン演奏交流会(コンクール)やJAA国際アコーディオンコンクールでの子どもや若者の出場者を考える時、その数の隔たりに驚く。「日本の音楽大学にアコーディオン科設置を」の思いを新たにした。

「ルA」? (簡体字と繁体字)

初日審査で私と松永氏の審査対象がスタッフから逆転して説明されたことは会報No.40に触れられているが、「貴方は室内楽組を」と案内されて入った審査会場で、いきなり子どものソロが出てきて面食らった。進行スタッフが飛んできて二枚複写の審査票(複写の意味は上記会報で説明済み)に「ルA」と書いてくれた。しかし、その意味を飲み込むまでに、多少の時間が必要だった。

いま審査しているのは児童A。「ルA」のAは分かる。では「ル」は?…児童?…しばらくたって、あーなるほど、「ル」は児童の児か。上の「旧」を取ってしまっている。中国には繁体字と簡体字



▲北京少年宮で演奏する子供たち



▲児童B組他を審査した中国の審査員たち。

がある。難しい中国語を何時の日か庶民に分かりやすい、字体を崩した簡体字を使う様になった、といふのを思い出していた。「少なくとも中国革命前までは文盲(今では死語だが)が圧倒的。

会話は筆談で

「審査員資格について」の記述はどこかに書いてあったか、聞いたか、ともかく《英会話ができること、教授の資格をもつたもの》とあった。見渡せば中国人といい、ロシア人といい、みんな教授資格の持ち主。われわれ日本からの審査員はというと、もちろん教授の資格は無いし(大学にアコーディオン科がないのだからしかたがないとしても)、英会話もままたらない。「日本アコーディオン協会幹部」として特別扱いされたものと察した。



▲スタッフの燕(ma xiao yan)さん

通訳に虞錫安氏(JAA理事長)が随行したが一人で二役は無理。結局僕は、中国人の砦に単独乗り込みとなった。そこで度胸を決めて、審査会場や審査員控え室で片言の英会話をぶつけてみるが、相手の英語もどうもあって今ひとつよく分からぬ。そこで紙とボールペンで筆談、と打って出た。出場者の楽器の調律が全体に良くないのでは?と質問してみたが、らちがあかない。あとは世間話。年頃40代の審査員。東京に娘が留学していると言う。名前は李女那(Ri Nuna)さんで年齢22歳。さらに「在東京大学」と書いてきた。(おお東京大学!)。ちょっとして、大学の前に「情報」と入れた。「東京情報大学…(ああコンピュータ関係の大学だな)」。みんな簡体字である。

審査中のある出場者に対し、審査員の一人からクレームがついた。何事かと様子を伺っているとスタッフが飛んできて、「相同×」と書き、 $(5+4+6+5) \div 4=5 -0.02$ と数式を綴った。理解に戸惑っていると、



▲天安門前の人民広場

第10回北京国際アコーディオン芸術祭(コンクール)顛末記

川口 裕志



▲(上)張自強会長と。
▲(下)張会長宅でごちそうになった月餅

なるもの以外は、アコーディオンをあまり弾かなくなるのかもしれません。とにかく僕の様に大人(おかげでヒゲまでやして…が楽器を抱えている姿は珍しく、凄いプロ奏者が日本からやってきたと思うようです。

♪子供にそそぐ、愛情と教育

教育熱心な上海ではアコーディオン学校を視察【写真】。教室では、清々しい雰囲気の若手の講師が子どもたちに笑顔でレッスン。子どもたちはそれぞれ母親や父親が付き添っています。中にはあまり授業に気乗りしない感じの子供も。

北京・上海と訪れ、文化の違いや共通点を味わいながらの中身の濃い旅でした。国が大きく、都市には様々な民族が集っていること。一人っ子政策の影響で親子の絆が強いのでしょうか、子どもにはたっぷりと愛情がそがれて、教育を受けている様子が印象に残っています。

♪ロシアのトップ奏者はアイドルなみ

旅の終わりには、フリーベースアコーディオンのパイオニアといわれるロシアのアコーディオン奏者、フレデリック・リップスの素晴らしいコンサートを聴くことができました。彼は北京で審査員と演奏をした後、ひとり別に上海に飛びコンサートをするというハードスケジュール。客席の様子はというと、北京でもそうであったように始終ざわめき通し、子どもたちが時折走り回るという状況。それにもめげず、現代作品からピアソラ、ヨハン・シュトラウス、そしてディープ・ブルーベックと幅広いジャンルを悠然と弾きこなしていました。

中国アコーディオン界ではロシアのトップ奏者は有名人。移動時にサインを求める子どもたちがおしかける様は、まさにアイドルのようでした。

今回はJAA理事の木下先生をはじめ、たくさんのアコーディオン関係者からのカンパによって視察に参加することができました。最後にお礼を申し上げます。

『前頁から』



「不相同」と付け加えた。「復調(ボリフォニー)」「課題曲」「自由曲」の3曲が出席者に科せられているのだが、同種のものを2曲弾き、計4曲弾いてしまったことから規定違反をついたのだ。そこで、減点-0.02とあわせ処理方法を提案したのだ。

やりとりはだいたい中国語でやっているから、僕だけでなくロシア人審査員もぼかんとしていたことだろう。審査員10人の大半が中国人だから、審査規定に歌い上げている問題については中国人審査員のみの処理で無事進むのである。コメントなしの点数付けだけが我々の任務なのだ。楽と言えば楽であった。波の様に押し寄せる出場者数を除けば…。

作曲家、李遇秋(Li Yu Qiu)氏

審査初日に初めて挨拶を交わし、暖かく迎えてくれた審査員たちの中に李遇秋さんがいた。我々日本人審査員に自作曲集を数冊用意して待っていてくれた。楽譜を最初から演奏する(当然!)のと同時に最後から逆に演奏する手法の記譜を試み、あたかもモーツアルトあたりの奇抜なアイデアの持ち主である。作風はやや古いとは思うが、アコーディオンの作品を数々作った業績が界隈で認められているであろう。現に開幕コンサートやコンクール出場曲には彼の民族的な作品が多くお目見えした。

例の如く筆談による会話を交わす。1929年生まれ(74歳)、作曲歴は1945年以来60年…(おう!僕の生まれる前からの活動だ!)。合唱の伴奏を初め、アコーディオンコンチェルトなど数々の作品を手がけて60年…ここまである。優しさ溢れるお仁であった(後で知ったことであるが、この方は中国アコーディオン協会の筆頭名誉会長であった)。

なんとPIGINIが…

出場者名や曲名のリストが審査員には渡されていない中では出場番号だけが頼りであるのだが、自分のメモとして個々の奏者をコメントするのに番号だけでは頼りない。そこで使われている楽器名に興味をもったのも手伝って、配布されたレポート用紙には出場番号と楽器名を書き、コメントを付け加え、さらに三つの演奏曲の点数、総合点をメモした。



上海アコーディオン協会会長を囲んで▼

え、さらに三つの演奏曲の点数、総合点をメモした。

審査した範囲ではあるが、なんとPIGINI(イタリア製)の多いのに驚いた(これは予測できなかったことだ)。中国の物価指数からすれば千万単位の相当な値段となるであろう。PIGINIといえばヨーロッパでは学生たちの多くが使用している楽器と聞く。それはBUGARIのそれを上回っていると。現に第3回JAA国際アコーディオンコンクール(2002年)の総合優勝を獲得したグジェゴシュ・ストバ(ポーランド)が使用しているし、日本で活動をはじめたディヴィッド・ファーマーもその一人。児童B組(9才以下)にはこの楽器の使用者はさすがにいなかったが、児童A組(10~12才)、少年A組(13~17才)と年齢が上がるに連れてその数も増えていったから青年組、芸術組などではもっと多いことだろう。

そしてこの楽器を使う奏者の演奏は全体に丁寧で洗練されている印象を持った。結果、採点も高く付けた次第だ。

とはいっても、もちろん圧倒的に多いのが国産のParrotやBaile、そして初めて聴くJINBEI(ジンベイねえ)。選びぬかれたの意(のぞうだ)など。とはいっても、もちろん圧倒的に多いのが国産のParrotやBaile、そして初めて聴くJINBEI(ジンベイねえ)。選びぬかれたの意(のぞうだ)など。他に、AdidiとかAKKO、なんて言うのもあった。ロシア製のバヤンなどもけっこう使われている。

しわくちゃのメモ書き

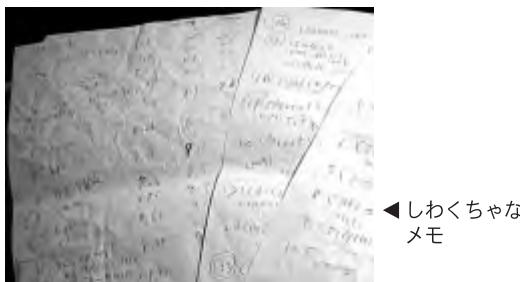
40人の児童A組を終えたかと思いきや、また10人の少年A組がどやどやと入場てきて、審査を終了したのは夕闇迫る午後6時過ぎ。朝8時半集合、9時審査開始であるから休憩時間を除いても延々8時間の審査である。ほとほとくたびれて呆然と帰途についたが、気がついたら審査中にしたためたメモを机の中に忘れてきてし



▲上海の繁華街

また。翌朝一番にスタッフを捕まえて事情を話す。これも片言の英語とゼスチャーだ。朝の忙しいなか、スタッフがよってたかって話を聞いてくれるのだが、相手に真意が伝わるまでに数分。ようやく意を得て、手分けして机を探しまわったが無い。しばらくして、男性がちょっと待ってて…というようなポーズで部屋を飛び出して行った。しばらくして、紙くずとして丸められ、すてられていたものを手に握って戻ってきた。「おう、これだ! あった、あった!」「シェイシェイ、シェイシェイ!」スタッフたちに握手して回った。

北京国際アコーディオン芸術祭のお揃いの白いTシャツを着て、忙しくたち回る若い男女のスタッフたち。このでかいイベントを裏で支え、日夜奮闘してきた若者たちに心から感謝したい。しわくちゃになった走り書きのこのメモを見るたびに、北京の彼らを思い出す。他人には単なる紙くずであっても、僕の審査の全てを投影し、2日間の審査の思い出がいっぱい詰まったこのメモは、日本に持ち帰った一番大切な宝物であった。



◀しわくちゃのメモ